

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第十八巻第五号（通巻第二〇九号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第209号

9. 2011

特別作品25句

菜つ葉服

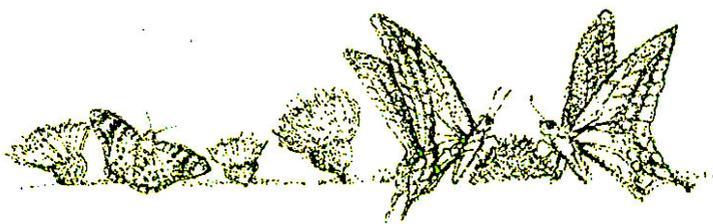
品川 鈴子

梅挽ぎの総出に軍手菜つ葉服

梅を挽ぐ肩掛バケツにゴム長靴

城の梅挽ぐ市の吏員みな軍手

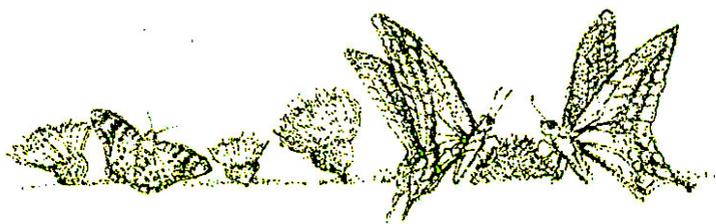
隠れん坊実梅見つける脚立班



脚立より探せば実梅次々と
籠城に足る梅挽ぎて公園課
築島に日傘があれば茶事さなか
殿が見し古柏のかかぐ避雷針
亀の子は掛け軸出でて洲浜這ふ
苦瓜を壁に這はせてITビル
追憶もかく霽る梅雨義兄の忌



一^む周^か忌^わの華^け足^{そく}はみ出る真桑瓜
一周忌のうからは梅雨の濡れ鼠
ひ弱なる長姉が米寿梅雨の明け
どでかくも紅花の東軽く受く
音欠けのカリヨン奏づ町祭
カリヨン塔雷に音階欠けにけり
ビリケンが神輿替りに舁き出され



前菜は夕顔の実を味噌和へに

下野の朝餉納豆と干瓢汁

薄切りのかんぺうサラダ歯にしゃきしゃき

中学生にどう教へむか花魁草

神戸つ子江戸つ子目高追ひ追はれ

共喰ひの太つ腹目高餌をねだる

ごきぶりに怯えて退ざる気儘猫



玉鈴

兵庫 田中 佳子

生け置きし端の太藪は早や折れて
大草木パフスリーブの少女来る
白靴に変へて明かるき谷の道
七変化ビルの谷間の定食屋
白日傘正午のビルの谷間縫ふ

大阪 谷 泰子

新居より望む青葉の生駒山
越して来し荷に囲まれて早梅雨入
青葉風般若心経よどみなく
盛るらん旧居に残したる杜鵑つばき花
高階に 拡声されて 青嵐

兵庫 恒成久美子

公園の遊具鈴なり遠足児
レンガ道割れ目にツンと野のポピー
菖蒲苑花どきすぎで痩せ雀
梅雨ひと日オールドファンの洋シネマ
蜥蜴きらりするりと藪へ逆もどり

吟

大阪 角谷美恵子

身振り手振り髭の語り部汗しとど
粹に生き七の倍数冷奴
テキストを団扇代はりに深呼吸
花莫塵にでんぐり返り姉弟
ピアニカに合はせ遠吠え虹の橋

愛媛 年森 恭子

弁当の復活を機に梅漬けり
太陽光発電設置梅雨晴間
南部鉄風鈴の音の鎮魂歌
禁煙の特効薬か新茶淹れ
装ひをグレードアップサングラス

兵庫 内藤 三男

堰を落ち椿一輪空を向く
東京のホテルにひとり柏餅
駅と駅つなぐ植田となりにけり
打水に決まりありけり上七軒
帰省子の五分ともたぬ江戸言葉

兵庫 中尾 廣美

文豪の机小さし青葉風
新樹光けんめいに漕ぐ車椅子
黒揚羽訪ふお茶室は閉ざされて
蛩待つ森の暗さを身に纏ひ
マクベスの開場を待つ夏の宵

大阪 中島 霞

王陵の闇の深さを牛蛙
梅雨寒や思考の回路つと途切れ
枕辺に白寿の詩集明易し
約款にルーペを這はず青葉冷
雨後の靄遠嶺を上る半夏かな

大阪 中田 寿子

万緑や薄くれないの吾子の爪
緑陰のひやりと陶の長ベンチ
母衣蚊帳の吾子健やかな寝息たて
蟻付きし果実みやげに貰いけり
娘らは甘く匂うて夏来る

神奈川 永塚 尚代

まつさらの水晶体に夏の雲
植田風術後の歩幅たしかめる
かりん樹皮ペろりとむけて薄暑光
求愛かけんかか金魚追いかけつこ
よく肥えた毛虫早足道渡る

大阪 野口喜久子

夏兆す塩瀬の帯に跳ねる鯉
未草宇宙受信の刻を待つ
追伸にちよつぴり本音額の花
白牡丹はらり御衣を解くさまに
頃合ひの熱き一椀夏料理

兵庫 蓮尾みどり

燕の子飛ぶきつかけを待つばかり
被災地の若竹載せて来る朝刊
隊員の迷彩服に梅雨しとど
梅雨じめり紙縫で綴じし香典帖
左利き手を替えて取るビヤジョッキ

兵庫 長谷川 鮎

法師蟬戦語りし叔父の訃に
宗祇の忌縮緬袋の藪を引く
へディングで三点目なり時鳥
継ぎ当ての布を四角に時鳥
古稀にして古今和歌集虫の声

兵庫 林 哲夫

喜寿過ぎて発声練習夕薄暑
昼寝覚ビデオ画像は静止中
父の日と言ふに留守居の昼餉時
鉢巻に負けじと走る夏帽子
古書店の冷房今日も停止中

兵庫 林 美智

この店もやはり売り切れゴーヤの苗
晴れ間みてゴーヤの棚を結びをり
葉の陰に亡夫の植糸しさくらんぼ
ささやかな庭ひとめぐり梅は実
疎開地の想ひ出たどる豆の飯

愛媛 福島 松子

夏未明遠慮がちなるクラクシヨ
進路選び行きつ戻りつ青蛙
梅雨冷えや連絡のまた行き違ふ
真夜中のマーガレットは月色に
十葉に小径半分占めらるる

兵庫 藤井久仁子

路の原あをあと鷹攻めらるる
辛口の母の戒め夏大根
屋久杉も岳人もみな滴れり
浜豌豆波の飛沫に育まる
植込みの十葉ばかり西洋館

兵庫 藤田かもめ

みちのくや朽ち家の床に梅雨茸
梅雨湿りのやうな輩と縁切らむ
小鼓の雨垂れ拍子額の花
薄の浮きつ沈みつ心字池
南溟に眠る御霊よ夕蛩

愛媛 藤田 宣子

枇杷熟す寸前又も台無しに
豆芽出で合掌したり揺れ乍ら
桃の花授粉の機械横目で見
鈴蘭の狭庭にきらめき俯きて
濃い三ツ葉たつぷりと入れ大巻寿司

兵庫 史 あかり

緑蔭の石鉮句碑の朱の落款
寄贈本に鈴のシールの涼しかり
一夜庵に風を通せば蚊も入り来
満水の豊稔ダム湖四方緑
天井川上れば下る梅雨の橋

兵庫 古井公代

棒切れに見えたる蛇が湖渡る
なめくじを殺め一日の始まりぬ
ひたすらに田植機を操り戦士めく
亡夫^つ知らぬパーマネントの髪洗ふ
聞き上手は諾ひ上手立葵

香川 細川 知子

指しやぶりやめられぬまま更衣
スカートのさらに短かき更衣
焼酎が旨く移住の島暮し
茶所の駿河眼下に新茶飲む
木下闇見物人がさす将棋

鈴の奏

品川鈴子選

若葉風自転車届く誕生日 兵庫 中井 光子

小さき幸四方の窓に若葉見ゆ
若葉風日曜參觀家庭科なり

ハーレーが若葉街道まっしぐら
パステルの一色さがす百の薔薇 兵庫 和賀 俊子

背伸びして自己主張の子アマリリス
ばら園を背に今身の若き画家

泣くことをバラ園の人許されよ
眠る猫グッピーの数減りにける 香川 吉井 潤

墓碑銘の「家」に棲みたる雨蛙
梅雨空に輪郭透けし真鍋島

旅靴猫のせんべつ蜥蜴入り
一匹の蟻乱したる舞の足 兵庫 改正 節夫

柿若葉地蔵尊守る古木より
しやぼん玉傍より母の童歌

囀りを耳に遊ばす釣の人
杖持たず闊歩したいな若葉道 兵庫 先山 実子

学校も信号も靄さみだるる
このところ度忘れ多し梅雨曇り

夏の雲三陸海岸地凶拵げ
青東風のマンション街は異国めく

道の辺の羅漢泣き出す走り梅雨
上京の子も見てるはず大夕焼

空に満つサンバのリズム風青し
庭石のごとく石棺花馬酔木 大阪 吉田 和子

幼の手葉裏の律つまみ出す
柵越しに戦闘機並ぶハイビスカス

砂を搔く目高の腹のふくれたる
りハビリの医師の癖まで覚え梅雨 神奈川 八木 紀子

種時けば今日か明日かと芽を待つ身
雨もよひ急いで植え付け土手の菊

客招き茶室一輪額の花
カレツジの表廟に燕の巢 兵庫 吉本 淳

金魚どち主逝きしをまだ知らぬ

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 向江 醇子 //

*選句は全て 品川鈴子

小さき幸四方の窓に若葉見ゆ

中井 光子

眠る猫グッピーの数減りにける

吉井 潤

美しい若葉の萌えが窓から眺められる頃ともなれば、世には命の喜びが溢れる。たとえ深窓の明け暮れとか、思いがけない災害あとや、篤い病に罹った病院の窓にも、明るい兆しを感じられる筈。まして住み慣れた家で首を廻すと、東西南北どの窓にも若葉が見える、この庶民的な何でもない景こそ幸福の正体と言うもの。

グッピーは最も飼いやすい熱帯魚のひとつ。ベネズエラ・ギアナ原産の淡水産硬骨魚で、雌雄の大きさや形が違い様々に改良されている。同じ家にペットとして大事に飼われながら、互に余り関心を示さず飼い主からの溺愛と飽食に甘んじて、猫は本来の狩猟本能を棚上げに、魚の獲り方も忘れて寝そべってばかり。よほど脂の乗った旨そうな魚でも嫌なのに、痩せつぼちの観賞用グッピーなどには食指が動かぬ、でも数の減る犯人にされては心外。

パステルの一色ひといろさがす百の薔薇

和賀 俊子

囀りを耳に遊ばず釣の人

改正 節夫

薔薇園では今や彩りを競う様に咲誇る。十八世紀頃からフランスで使われた乾性絵具のパステルは、レーキ性の色料に炭酸カルシウム・白土などを加えた粉をアラビア・ゴムなどで棒状に練り固めたもので、あらゆる優れた色を備える。でもやはり自然の彩りには及ばないで、造化の神に軍配がある。

海釣りではなく、溪流の中に糸を垂れて、魚のかゝるのを待つ。鋭い目をしながら。耳に聞こえる鳥の囀りは心地よいものであっても静寂の中釣る事に集中している。

夏の雲三陸海岸地図抜け

先山 実子

青空にぼつかり夏の雲が浮いている。毎年見慣れた景なのに今年も東日本大震災が起きて、東北の方々の思いと共に空を見上げる。宮城県三陸海岸を地図で確かめ乍ら、鎮魂の思いを込めて。

上京の子も見てるはず大夕焼

高木 篤子

今日の夕焼はまあ見事なこと。進学か就職か上京中の我が子もこの夕焼空を見ているだろう。同じ空を共有していることで心も共有している。温かい親心が共感を呼ぶ。

幼の手葉裏の苺つまみ出す

吉田 和子

幼い子は目もよい。繁った葉の中にかくれた苺を見つけて可愛い手で「ここにもあったよ。」と差し出す。楽しい会話の聞こえる句。

リハビリの医師の癖まで覚え梅雨

八木 紀子

こうして何年この病院に通ったかしら、とうとう担当の医師のふとした癖まですっかり覚えてしまった。これからも長い通院生活、折りしも梅雨、少し心が暗くなる。梅雨は明けるもの晴れが待っています。明るくりハビリしましょう。

金魚どち主逝きしをまだ知らぬ

吉本 淳

悠々と鉢の中を泳ぐ金魚、貴方達を可愛がっていた人はもういないんだよ。淋しいね。誰かと分かち合いたい。悲しみの表現、読者の胸を打つ。

竹落葉土の湿りをやほと踏む

岡村 尚子

乾いた土に散った落葉はカサカサと音がする。でも湿った土一杯に敷かれた竹落葉の道の弾力を足裏で感じ乍ら行くのは心地よい。竹林の静寂とした景色。一人でも友と一緒にでも歩いてみたい。